ゼンマイ仕掛ケノ人間達

神梛

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
ゼンマイ仕掛ケノ人間達

【Ｎコード】
Ｎ９５７９Ｘ

【作者名】
神棚

【あらすじ】
人間の魂には
一人一人ゼンマイがついている
「ゼンマイは人を表す」
「ゼンマイが止まれば人も止まる」
ゼンマイの見える？稀と
変わり者達の物語

一巻目　？稀

私は変わっているらしい
「変な奴だ」とよく言われる
自覚はしているのだが、
納得はできていない

だって
あの「ゼンマイ」が見えるのは
私だけだから

平凡な高等学校
平べったい毎日の一コマ

夏休みとやらの前日のこと
真夏の白い太陽の下で、
クーラーのない教室の中にぐっすり寝ている高2が一人・・・

「おい赤月！寝るな」
世界史の教師が怒鳴る
「うーん？」
（眠いんだから仕方ないでしょーが）
心の中で文句を言いつつも
のたのたと体を起こす。

彼女の名は
「赤月　？稀」
ユウキなどという男のような名前のせいなのだろうか？
炎天下の中ぐっすり寝られる図太い神経と、
荒っぽい性格を持っているゴーイングマイウェイな少女だ。
だが成績の総合得点では学年トップ5に毎回必ず入っている、何故だ
まぁ簡単に言うと
『性格は馬鹿だが脳みそはある』といった感じだ。

「いい加減にしろ全く」
「ほーいほい」
「単位減らすぞ」
2年に進級し早二ヶ月、先生方もそろそろ彼女（の扱い）に慣れて
きたようだった。
一方、
そんな人達のことも考えず
？稀は別なことを考えていた。

（今日の晩飯何にしようかな？）

呆れるしかない奴である。（ちなみに？稀は一人暮らしだ）

だが、周りの人間は知らない

彼女の瞳に映る「物」を
見えていないのだから
どんなに見たいと思っても

決して見られる物では

無いのだから・・・

一巻目　?:稀（後書き）

気まぐれ作品です
どうぞよろしくお願いします。ＷＷＷ

二巻目　変わり者

「あー帰りたくない」

学校の帰り道でそんなことを呟く?稀
そんな彼女の前をホコリがふわふわ通る
帰り道と言っても、自分の家のドアの前・・・・

鍵を取り出し、

鍵穴に差し込み

カチャと開けた
はずなのだが・・・
開いている

ハァとため息をつきドアノブを回し、

ドアを開けた途端

「ユウーーーーーーっ!!!」
というめちゃくちゃデッカイ声と共に、
少女が抱きついてきた。
首が絞まる
「杏・・・イタイ、放して、死ぬ」
杏と呼ばれた少女は「ありゃりゃゴメンゴメン」と首に巻きつけて

いた腕を解く

「鍵掛けてあったのになんで開けちゃうわけ？」
「そりゃあ開くから開けたんだよ」
「理由になってない」
どうしてそうなるんだ。
どうしてそう思うんだ。
「でもひどいよーあたしが家にいるって分かった途端に『帰りたくない』って言ってるし」
「何で聞こえてんの？」
「ハハハッ♪寒いだろうし上がりなよー」
「そこはあたしの家だ」

少女は
射済　杏
薄茶色のショートカットで大きな目が愛らしい
陸上部の部長で様々な大会に出ているスポーツ人間。
？稀と杏は小学生からずっと一緒で、
いわゆる幼なじみという関係だ。
天然で誰とでもなじめる性格の杏は、男子にもかなりモテモテなため・・・
敵が多い。

「そーいえばさー」
人の家で勝手にお茶を入れながら杏は話し始める。
「何？」
「また出たらしいよー」
「強盗？」
「違うよ『死神』の連中だよー何かやろうとしてるってー」
『死神』

その言葉に?稀は顔をしかめる。
「どっから聞いた?」
「えっへん!勿論『死神』の連中からだよー」
「要するに盗み聞きしたってことか」
杏の聴力は半端ではない
１００メートル先の内緒話もうるさいとのことで、
人混みにはなるべく入らないようにしているそうだ。
「で何かって?」
「それは言わずともよく分かってるでしょー」
「・・・うん」

『死神』というのは多分人ではない
人間を殺し、魂を取る・・・いや『刈る』

?稀と杏はその現場を見た。

大きなギロチンの刃を持った少女が
人間に向かって刃を振り下ろした、
そして
人間の魂を見た。

いびつな深紅の塊だった。
そのとき?稀は気がついた

魂に小さなゼンマイがついているのを・・・

『死神』はそれを持つと
こちらを見て
「あら、こんにちは私死神と申します以後お見知りおきを」
そう一言だけいうと
霧のように消えていったのだった。

それからだった、？稀は日常で魂がみられるようになった。
ゼンマイ仕掛けの魂がみられるようになってしまった。

杏はそんなこと無いらしいが耳が異常なまでに良くなったそうだ
しかし、ゼンマイの話を杏に話しても
「そんなの無かったよ、魂ってきれいなまん丸だったもん」と言う。

だが、二人して「変わり者」になってしまったというのは事実であった。

二巻目　変わり者（後書き）

うへー
べたべたですな。
あと、
キャラの名前は
アカツキ　ユウキ
と、
イズミ　アンズ
です。

三巻目　平和の終わり

「死ね」
そう言って黒い死神は
大剣を・・・

「杏、そろそろ帰んなよ」
一瞬静かになった部屋に?稀の声が響く
杏は
「えーじゃあ寂しいしユウ一緒についてきてよー」
文句をぶつぶつ言って
口を尖らせる杏
「何でだよ」
「いーじゃん別に」
と?稀の腕を引っ張る
「ヒマでしょ?」
「・・・」
そう言われると・・・
ヒマだ
「分かったよ」
毎度結局折れてしまう。
あーあ甘いなぁー

・・・と、いうことがあり
?稀は杏の付き添いをすることになった。
杏の家はメッチャ近いが・・・

しばらく、歩いたとき声がかかった
「あっお姉ちゃん!?稀ちゃん」

「雪奈？なんでここにいるの？」
声の主は杏の妹、雪奈だった。

杏には双子の妹がいる
姉は相梨
妹は雪奈という。
二人とも姉に似て運動神経がメチャクチャ良い。
（そして喧嘩っ早い）

「いや、相梨と喧嘩してさー家に入れてくれないんだよね」
「やっぱりか」
呆れ顔の杏
これはある意味夏の風物詩である。
「あんた達兄弟はいつまで経っても変わんないね」
「そうかな？」
ハモる二人
「それはそうとお姉ちゃん鍵持ってるでしょ？」
「・・・」
「お姉ちゃん？」
「・・・なくしたらしいねこのアホは」
ニヤっと笑う？稀
「もー頼れないんだから、先いってるよ」
そう言って駆け出す雪奈

ゾワッと嫌な予感がした
寒気と言うより悪寒がしたという感覚だ。
それを感じた途端、？稀は自然と叫んでいた。
「雪奈っ！走れ！」
「？」
何を言っているんだ？とでも言いたそうな顔で雪奈が振り返る。

「ユウ？どうしてそんなこと・・・」
杏もけげんな顔した・・・その時

ガリ・・・と地面を削るような音が聞こえ
振り返った雪奈の後ろに漆黒の影がスッと現れた。
？稀の顔が青くなる
杏は・・・・いなかった、いや、目にも留まらぬ早さで走っている。
妹の元へ
そして雪奈の腕を引っ張って駆け出した。
雪奈も杏の腕を強く握る。
だが、影も速かった
あっという間に杏に追いついてきた
「っ！お姉ちゃん！」
雪奈が叫んで姉の手を放す。
「雪奈！？」
雪奈はそこから飛び退いて地面に転がる・・・・そして
ガインッ
と地面に何かが当たる音
そのとき
？稀の目がとらえたのは・・・
黒いマントを身につけた大男だった
手には大きな剣を持っている。
男は？稀を見て笑った、そして・・・
「お前達には俺が見えるのか」
と言葉を発すると
雪奈に向けて
こう言った

「俺は死神、ということで」

「死ね」

三巻目　平和の終わり（後書き）

イミフメイ
しばらく更新できないかもぞよ

四巻目　死神

目の前で何がおこっているの？

この黒い奴は何？

なんで雪奈に剣を向けるの？

雪奈が何をしたの？

あたしの妹に何を・・・

耐えきれなくて目を閉じた

黒い赤色が

見えた気がした

どのくらいの時間が経ったのだろうか・・・
目を開いても黒々としたアスファルトが見えるだけだった。

雪奈の目の前で刃は止まっている
否、止められている
黒い、制服のような服を着ている少年が、大きな鎌で大剣を止めている。
少年の隣には黒髪で、少年と同じ制服姿の少女がいた。
?稀達と同い年に見える
「危ねぇなー、何やってんだよお前」
静かな市街地にだるそうな声が響いた。
多分少年の声だろう。
「え・・・なに?」

杏は目が皿になっていて、
驚きすぎたのか雪奈の顔は凄い。
「っ！お前邪魔を・・」
「悪神ガルド・ラーベス、規定違反及びその他諸々で連行します。
デスサイズを捨てなさい。」
少女が冷ややかに言う。
いつの間にか杏が？稀の隣にいた。
「・・・あれ誰？？稀の知り合い？」
「いくらあたしでもあんなに有害そうな知り合いはいないから」
鎌持ってるし・・・
「・・・ちっ」
「あっ！おい待てよっ！」
その声に振り向くと大男はいなくなり
唖然としている雪奈と、なんかよく分からん二人組がいた。
杏は雪奈に駆け寄り
「怪我ない？大丈夫？」
と、声を掛けているが
返事がない、ただの気絶のようだ。
「・・・何この風景」
あの二人組・・・
そして、あの鎌・・・
顔色が悪くなったのが自分でも分かった。
「えーと」
とりあえず・・・
「あの・・・あんた達誰？」
二人組は驚いたように顔を見合わせると声を揃えて

「え、見えるのっ！？」

・・・ハイ？何が？

「え、何のこと・・・・？」
と聞くと
「いや」
と少年は頭を掻いて困っている。
少女は
「私達は普通なら人間には見えない筈なのよ・・・なのに・・・・」
と言った。
見えない？
それを聞いた途端いろんな質問が頭の中を駆けめぐった。
「それってどういうこと？つーか、さっきの大男は？あんた達は一体何なの？あと、あんた達のた・・・・」
「ストォーップ！」
大声で少年が制した。
「んな矢継ぎ早に質問されても俺たちは困るんだよ・・・・」
「あ・・・ゴメンナサイ」
暴走してた・・・恥ずい・・・
「ユウ？」
また、いつの間にか杏が隣にいた。
瞬間移動でも出来るのか、こいつは・・・・？
「この人達は？」
杏の、この一言で二人が固まった。

「えぇっ？見えるのっ！？」

「二回も言わんでいいっ！」
杏はきょとんとしていた。
状況が飲み込めない・・・
その時ふと思い出した
「あ、雪奈は？」
杏は

「さっき家に送ったよ、相梨も反省してたみたいでよかった」
杏が笑って言う
なんか空気が和やかに・・・
「あの・・・」
きまりわるそうに少年が口を開く
「あの大男に襲われた経緯を、教えてくれないかな」

四巻目　死神（後書き）

久しぶりの更新です。
結構たくさん書けた・・・かな
新キャラです。

五巻目　二人の神

?稀の家は少しボロいアパートの2階小さい地味な部屋で、机とパソコンくらいしか物がない
杏は『もっといろいろ置けばいいのにー』と家に来るたびに言う、そんなことを言われても掃除の苦手な私は何かをを置くと三日で家が凄いことになるのだ・・・
物（ｐｃ以外）を置く気になんぞなれるわけがない。

「上がってよ何にもないけど」
杏と二人組を案内してお茶を入れ（何もないとは言っても食器などはしっかりしている。）
とりあえずみんなで机を囲む、そして少年がしゃべり始めた。
「じゃあ君達があいつに何で襲われたのか教えてく・・・」
「・・・待って、まずあんた達がどんな人であの男は一体何なのかを説明して」
杏が少年に声を掛ける。
こいつは何かと行動力があって助かる。
隣の少女が少年を見て大仰にため息を吐く
「私は明宮紗織、死神という仕事をしているの」
「し、死神！？」
「ユウこれって・・・」
死神ってあの大男も・・・
「何か知っているの？」
「みたいだね・・・」
置いてけぼりを食らっていた少年が言った。
「俺は大部翔也って言うんだ。紗織と同じ死神・・・って死神っていうのがどういう物なのかよく知らないと思うけど・・・」

「『ゼンマイ』を刈る人？」

ボソッと呟いた疑問に翔也と呼ばれた少年が反応した。

「！」

少年の気楽そうな笑顔がみるみるうちに消えていった。

「違いますか？」

「君は一体何なんだい？何で『ゼンマイ』を知っている？まさか見えるのかよ？」

急に翔也の目が冷たさを帯び、寒気がした。

杏も困ったような、緊張しているような顔をしている。

その時、じっと翔也をにらんでいた紗織が・・・

翔也を殴った

グーで・・・

「い、痛い・・・マジで」

紗織は呆れたように床に伏せる翔也から目線をずらし、またため息を吐いた。

「ごめんこいつ馬鹿だから」

・・・・・そーでしたか

杏が不思議そうに口を開いた。

「えーと、死神ってそこら辺の人を殺しまくる通り魔みたいなものなじゃ無いの？」

確かにその質問は自分も聞きたかった。

あの大男や、あの日見た死神を名乗るギロチン女・・・

奴らと目の前にいる彼らが同じ物とは思えなかったからだ。

「違うわ、私達は人を殺している訳じゃない」

「え？それってどういうこと・・・」

「ユウ・・・って言うの？彼女・・・」

「いや、？稀だから！」

ユウと呼ぶのは杏ぐらいだ

「?稀・・・なの?」
紗織とやらの話をまとめると死神というのは、今まで自分達の考えていた物とはずいぶん違う
良い人種なようだった。

「私達の仕事は死人の身体から身体の動力源である魂を分離させて、その魂を核にして新しく人間を創ること。あなたがさっき『ゼンマイ』を刈るって言ってたでしょ?『ゼンマイ』って言うのは身体と魂を繋ぐ物で、言うなれば・・・そうね身体は人形、ゼンマイはコード、魂は電池と言うとこかしら?」
「じゃあ人はどうして死ぬの?魂を繰り返し使えるなら死ぬなんてこと・・・」
「いや、人が死ぬのは電池切れのせいじゃない」
頭を押さえながら翔也が言う。
「人が死ぬのは、身体に取り返しの付かないような傷がついてゼンマイが壊れたり、長く生きてゼンマイに負荷が掛かって壊れたり・・・普通の人間には『ゼンマイ』は見えない筈なんだけどさ、コードがショートしてしまったら人形は動かないだろ?その人形から電池を取り出して新しいコードを用意して人間を創る、OK?」
「OK!」
杏はいつからオカルトが好きになったのか興味津々だった。
「・・・人形ねぇ」
うさんくせー
めんどくせー
そんなことを心の中で連呼しながら話を聞く
「じゃあさっきの大男は?あいつ自分のことを死神って言ってたけど」
「・・・え?嘘ぉ!」
「本当だよ」

『俺は死神、ということで』
『死ね』

まだあの言葉が耳に残っている。

「うーんあいつはね・・・悪神だよ、悪い神」
翔也が顔を険しくさせ、紗織が眉をひそめる。
「悪神って？」
杏が聞く
全く、面倒なことに首を突っ込むのが好きな奴だ・・・
毒気を抜かれる。
「悪神は何らかの原因が元で、人殺しを始めてしまった死神なんだ。
奴らが何をしようとしてるのか気になって調べていたら、君達が都
合よく襲われていたんだよ」
「都合良すぎだろ！」
「あはは」
「おい杏笑うな！」

あの子も悪神・・・
そう紗織は呟いた声は小さく誰にも聞こえていなかった。

五巻目　二人の神（後書き）

ハイ名前紹介
アケミヤ　サオリと
オオベ　ショウヤです
主要な方々なので今後ともよろしく。

六巻目　物語の始まり

今日、本日、夕暮れ時に
謎の大男に襲われました。
謎の二人に助けられました。
二人を家に招きました。
話を聞きました。
死神を知りました。
・・・。
そこまでは良いんです、良いんですよ？
でも・・・
「刃物はダメだろ刃物はっ！」
「えー」しばらく話す間に、死神の二人組、紗織と翔也とはだいぶうち解けた。
まぁ助けてもらったし・・・
しかし！鎌を持ち込むのはできる限りやめてもらいたい
だって怖いし・・・
なのに

「仕方ないじゃん、これないと俺死ぬし」
「死ぬ？」
「うん、死ぬ、俺のこの鎌は『デスサイズ』って言って、死人の身体と魂を分ける道具なんだ。」
「ちなみに、コードはしっかりしてる『デスサイズ』は私達の電池なの・・・無くしたりしたら死ぬから」
「道理で魂が見えなかったわけだ・・・」
「やっぱり見えるんだ君」
「・・・」
とのことで家に刃物が入るのを許可せざるおえなくなってしまった。
人外の方々をうちに入れた時点でアウトだったんだろうな・・・
失敗した。
その時杏が思いついたように・・・と言うかおもいだしたように二人に聞いた。
「そういえばさー二人は私達には見えるのになんで他の人たちには見えないの？」
・・・忘れていた

「うーん、
分かんない」

二人の回答は分からないでした。
「私達も何でも知ってるわけじゃないの」
「そっかー残念」
知りたかったんだけど・・・
「じゃあ、話を戻そうか、君達は何であいつに襲われたんだ？」
「あたしが知るかアホ」
こっちが聞きたいわアホ
「ん？ねぇ杏そういえばあいつって雪奈を狙ってなかった？」
「セツナ？誰だいそれ？」

「あたしの妹だよー」
「杏ちゃんの・・・」
「ちゃん付けやめい」
「あ、それはあたしも」
「んじゃ？稀たんと杏ぴょんでＯＫ？」
「・・・その鎌であんたのこと切っちゃだめかなぁ？」
貴様を見ていると殺意が沸いてくるんですが
マジ殺して良いか？
「・・・怖い顔するなよ、冗談だからさーｗｗｗ」
「ああ言う冗談を言う奴は馬鹿→馬鹿は死ななきゃ直らない→死ね」
「？稀も杏も熱くならなくても大丈夫よ、私が殺しておくわ」
「・・・いや紗織止めよう？」
【お願いしまーす】←杏とハモッた。

惨殺シーン中

「それで、杏の妹さん・・・雪奈ちゃんが狙われた理由は不明なのね」
「それこそ私達が聞きたいし」
「あともう一つ聞きたいことがあるのだけれど、良い？」
「いーよ」
杏がなんか眠そうだ、面倒な話嫌いなのに首突っ込むからこうなる・・・
「あなた達の能力はどんな物なのか、何処で身につけたのか、さっきから気になっていて・・・」
うーん
どんな物かは分かりきっているが、何処で身につけたのかはよく分からない・・・言うならば

「あたしの能力は分かってると思うけれど人間の・・・それ以外もだけど、魂を見ることができる」
「うちは異常なまでに耳が良いんだ」
「分かったわ、で、何処で、何故、その力を身につけたの？」
「何故が追加されていると思ったのは気のせい？」
「さぁ？気のせいじゃないのかしら？」
「・・・あっそ、何処でっていうのはよく分かんない。でも、時期的には〔初めて死神を見た時〕なのかなぁ？・・・ん？もしかしてあのギロチン女って悪神か？」
「！」
「そうかもね、ユウ、だって初めて見たあの死神は歩いている人の魂刈ってたもん」
「そう・・・なの・・・」
「？・・・どうかしたの？」
「いいえ・・・別に、それよりその時刈り取られた魂が、あなた達には見えたの？」
「うん、ってことはやっぱりあの時からなのかー能力に〔目覚めた〕？って言うのかな？」
「〔目覚めた〕、で合っていると思うわ。人間は誰もが全員・・・と言うわけではないけれど何人も始めから能力を備えているものだから」
「目覚めない人もいるの？」
「いるわ、と言うか目覚めない人間の方が多いわね」
「そうなの？」
ということは私達には運という物がないと言うことか・・・トホホ
「目覚める理屈は私達にも分からないわね」
「・・・ふーん」
「あなた達これからどうするの？こんな魑魅魍魎と関わってしまった以上確実に何か良くないことに巻き込まれるわよ？」
「巻きこんだのはあんた達じゃ・・・」

そう言うと紗織（さん？）はクスッと笑い・・・つーか可愛い笑い方も出来るんだなぁ
「巻きこまれる運命だったんじゃないの？」
「嫌な運命だな、どうするって言われてもねぇどうもしないし・・・杏？」
「あいつがまた襲ってくる可能性はある？」
「・・・９０％（うう・・・痛ぇ）」
「９０パー！？マジで？つか起きたんだ？」
「紗織も君達も酷いなぁー」
翔也はタフだなぁ
「・・・後でこいつにもう一発お願い」
「了解」
「了解すんなよ！て言うかまだ、あちこち痛いんだけど！」
そりゃそうだ、あんなにフルぼっこにされてたし・・・アザ残ってるし・・・
「？あ、翔也起きたんだねーさっきなんか言ってたよね？あしこし痛いとか・・・」
「俺はそんなに年寄りじゃねぇよ！」
「そして杏は気付くの遅いよ」
そう言うと杏は顔を曇らせて言った。
「９０％・・・だよね」
「！」
「杏・・・」
不謹慎だったと後悔した。
あいつは魂を刈るんだ、魂を刈られるというのは
『死ぬ』ということなんだ・・・
「ユウどうしよう、雪奈が・・・」
いつも明るい杏の瞳に涙が浮かんでいた。
手も震えている
喧嘩をよくすると言っても杏にとっては大切な妹なのだ。

「どうしよう・・・守らなきゃ・・・雪奈を守らなきゃ」
でも自分に出来ることは今は何もない、紗織や翔也のようにあたしは強くない
手を握ることくらいしか・・・出来ない
でも
「守るよ、雪奈がいなくなるのは嫌だし、悲しむ杏を見るのも嫌だから」
「ヒュー良い友情だネボぁっ！」
「翔也黙れ」
翔也の頬にすっげえアザが・・・
「・・守るわ、私達も力を尽くして」
「え？どうして」
「あたしと翔也は死神の中でも実力のある方だし、あと」
「あと？」
「あなた達って面白いなーって思ったのよ、あなた達の友達になりたいなって」
「んぐ、痛ててて・・・紗織本気か？俺は別に構わねぇけど・・・」
「本気よ？運命と言っても私達が巻きこんだには違いない、なら私達があなた達を助けるべきでしょう？」
「人間の友達ねぇ・・・良いと思うぜ？」
「・・・死神の・・・友達」
「いいの？本当に？」
「だから良いって言ってるじゃない、私のことは紗織でいいわ」
「俺のことも『あんた』って呼ぶの止めろな、あと『アホ』も止めろ翔也でよろしく」
あたしと杏は顔を見合わせたそして・・・
「じゃあ」

【二人ともこれからよろしく】

【こちらこそ】

六巻目　物語の始まり（後書き）

いえぁっ
一章完でさぁ
【】はハモりの時使ってマス

友人の突っ込み
「一巻目とかってカンって読むの？」

すいませんアレは
ヒトマキメです・・・
二巻目は
フタマキメ・・・
紛らわしくってすいません

最近気付いたこと←
・・・あれ、なんかだんだん本編の文字数増えてないか？

一巻目　始めの一日

「おいおい・・・勘弁してくれよ・・・」
暗闇の町の中
大きなカバンをぶら下げた少年が苦笑いを浮かべて後ずさっている。
少年の前には生気のない目をした少女が微笑みながら立っている。
「お前は元々死神だろう？いい加減に・・・」
少年がそこまで言った時、恐ろしく怖く微笑む少女は
「あなた達がいるからいけないの、あなた達がいなければ私は幸せだったのに・・・」
そう言い
持っていたギロチンの刃を少年に向けて振り下ろした。

夜
？稀の家（アパート）の前で・・・
「じゃあ今日はいろいろ聞かせてくれてありがとな」
あの後、死神の二人と少し雑談をして、
杏は両親に「今日はユウの家に泊まるね」といつの間にか連絡してて
家はいつも以上にうるさくて賑やかだった。

でも、二人もいろいろ急がしい身のようなので帰ることになった。
「うん、じゃあまた今度」
「気をつけてね・・・奴らはいつ来るか分からないから」
「うちも雪奈と相梨を出来る限り守るよ、妹だし」
「頑張れなー」
そう会話して二人は夜の闇に溶けるように消えていった。
「よーし、ユウっ！家入って枕投げしよう！」
「なんでだよ」

とまあ枕投げは運動神経の良い杏の圧勝で
今日は夏休み前だっつーのに凄く疲れた。

翌朝夏休み一日目　布団を干そうとしたとき・・・
「え？」

・・・これは何でしょう？
ベランダの布団干す所にぶら下がっていると言うか引っかかっている
この物体
どっからどう見ても
金髪人間のハエニエ・・・・
「ぎゃあああああああっ！」

「ど、どうしたのユウ！？」
叫び声を聞き今日家に泊まっていた杏が駆けてくる。
「どーしたもこーしたもあるかぁっ！べ、ベランダに・・・・」
「ん？何？」
そう言って杏はベランダを覗く
「ひゃあ」
あたしの方に振り向いた杏の顔色は白かった。
「何あれ？金髪外国人のハエニエ？」
「人間ハエニエにするってどんな鳥だよ・・・っていうかうちの家のベランダはハエニエが出来るような針つーか棘とかないよね！」
そう言ったときベランダから
「だ、誰か助け・・・」
「・・・」
「・・・」
【生きてたのっ！】
蚊の鳴くような声を出す布団状態の少年をとりあえず中に取り込・・・入れる
息はしている、なんとか生きてはいるようだった。
怖っ！もう少しで殺人疑惑が掛かるとこだった・・・
「いやーアリガトー死ぬかと思ってー」
「大丈夫？」
杏は誰とでも息が合うなーでも少しは警戒しろよ
心の中で突っ込み
「でも近所に見つかん無くてよかった・・・」
「あははそこは大丈夫俺人間に見えないし」
「へー凄いねー」
金髪少年と杏はニコニコ笑う
杏と似てるなこいつ・・・
ん？今なにか凄く聞いたばっかりのセリフを聞いた気が・・・

「・・・ねぇあんた死神？」
「え？君達もでしょ？」
「・・・。」
死神到来！しかも二日連続でっ！
近所の人に見つからなかった理由発覚！
「杏あたし頭痛いから病院いくわ・・・」
「現実逃避はやめなよ・・・」
「えぇーっ！君達人間なの！？」
「気付くの遅っ！」
本当に杏か！
すると少年は
「この辺りでナイフ狂の美少女と鎌を持ったひねくれ者見なかった？」
「鎌を持ったひねくれ者は知ってる、おしとやかな美少女は見た」
紗織と翔也か
「何処にいる？」
「知るか！」
昨日会った時聞いてなかったし
「紗織と翔也でしょ？」
「杏、初対面の怪しい奴に情報を与えるな」
「うわぁ・・・何であいつらと面識あるの？」
そりゃ一応
「友達だし」
「・・・」
少年は絶句している
その時ドアがノックされた
「はい？」
「宅急便です」
「・・・。」
親戚もいない自分に一体何処の何奴が物を送ってくるというんだ

ドアを開こうとしたが、ドアの方から開いた。
「ひゃっほー一日ぶりだなー」
「おはよう二人とも・・・あと何かいるけど」
「う、噂をすれば影っていうのはマジなのか！」
偶然の神様あたしは貴方を深く恨みます。
運の神様あたしは貴方を深く憎みます。
「うわっアル何やってんだよ」
「アル？」
「おー翔也、久しぶりだねー」
「知り合い？」
あーあ
家がどんどん賑やかになってく・・・
「こいつはアルシーノ・ディークルイタリアのローマ担当の死神なの、で、何か用？」
「うん主に紗織に用がある」
「なに？」
「・・・マリーちゃんに昨日の夕方、ローマで会ったよ」
マリー？誰だそれ
そんなことを考えているうちに紗織と翔也の顔がスーっと青ざめていく
「嘘・・・」
翔也にこっそり
「あの、マリーって一体・・・？」
と聞いてみたが・・・

「誰だって良いだろ」

何か言ってはいけないことを言ってしまった、
そんな空気が静かに流れた
「・・・ごめん、悪かった、別に誰でもないんだ、ただ・・・それ

を紗織にだけは聞かないであげてくれ、頼むから」
「うん分かった」
気楽そうなこの二人にも聞いてはいけないことがあるんだと思った。

空の青いこの夏に、これから一体何があるのかは誰にも分からなかった。

一巻目　始めの一日（後書き）

二章に入り
新キャラ・・・なんか新キャラばっかり出してないか？
これからもよろしくお願いします。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n9579x/

ゼンマイ仕掛ケノ人間達

2011年12月11日14時54分発行